大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

ラフカディオ・ハーンと日中怪異譚：「青柳の話」を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小山, 瞳 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00017690

ラフカディオ・ハーンと日中怪異譚
――「青柳の話」を中心に――

小　山　　瞳

大阪府立大学人文学会　人文学論集　抜刷
第40集（2022年３月）

ラフカディオ・ハーンと日中怪異譚
――「青柳の話」を中心に――

小　山　　瞳

はじめに

ラフカディオ・ハーン（Lafcadio Hearn）の『怪談』（Kwaidan）所収「青柳の話」（The story of Aoyagi）は、能登（Noto）の侍・友忠（Tomotada）と柳の精の娘・青柳（Aoyagi）の異類婚姻譚である[1]。「青柳の話」は大きく前半と後半に分かれ、ハーンは前半と後半の途中に次のような文をはさむ。

> ここで日本語原話には話の途中に奇妙な断絶があり、そのために話はそれから先ちぐはぐになっている。友忠の母についても、青柳の両親についても、能登の殿様についても、もうこれ以上の言及がない。作者はこの辺りで書くのが面倒になり、大雑把にはしょり、話の先を急いで、驚くべき結末に向ったのであろう。原作で省略された部分を補うことは私には出来ない。また構成上の欠陥を直すことも出来ない。しかしそれでも多少は細かい説明を補うつもりである。それなしには残りの話がまとまらないからである。友忠は青柳を連れて京都へ急いだが、その結果厄介な目にあったらしい。しかしその後この二人がどこに住んだかについては説明がない。

ここでハーンのいう「原作」とは、江戸時代の『多満寸太礼』巻三「柳情霊妖」を指す[2]。『多満寸太礼』（以下、『玉すだれ』と表記）は江戸前期の辻堂非（兆）風子（以下、「辻堂非風子」と表記――注）の編による浮世草子集である。『玉すだれ』については、『太平広記』、『剪燈新話』などの中国小説筆記ほか、『伽婢子』、『今昔物語集』などから

1　本作品について平川裕弘編『怪談・奇談』（講談社学術文庫・講談社、1990年）の訳文を用いる。この作品の引用紹介については、以下、本書によって日本語表記とする。

2　前掲平川書339～340頁参照。

の影響も指摘されている[3]。

1、「青柳の話」原話とその「断絶」について

ハーンが「青柳の話」のなかで指摘する、原話の「奇妙な断絶」とはいかなるものであろうか。それについて知るために、まずは原話『玉すだれ』「柳情霊妖」について、特に重要な箇所は原文を挙げつつ、梗概を挙げることにする（傍線は引用者、以下同じ）[4]。

> 文明の年中、能登の国の太守、畠山義統の家臣に、岩木七郎友忠と云ふ者有。幼少の比より才智世に勝れ、文章に名を得、和漢の才に富たり。ようぼういつくしく、いまだ廿にみたず。義統愛敬して、常に秘蔵し給ふ。生国は越前にして、母一人古郷にあり。世いまだ静ならねば、行とぶらふ事もなし。
>
> （『玉すだれ』巻三、13丁オ）

その後、友忠は主君の命を受け、山名方の一城を攻めることになった。城攻めのついでに、単身、母をたずねて馬に乗って、北国の道を進む。

> 比しも、む月の始つかた、雪千峰を埋み、寒風はだへを通し、馬なづむで進まず。路の旁に、茅舎の中に、煙ふすぶりければ、友忠馬をうちよせてみるに、姥祖父、十七八の娘を中に置、只三人、焼火に眠り居たり。その体、蓬の髪ハ乱れて、垢付たる衣は、裾みじかなれども、花のまなじりうるはしく、雪の肌、清らかにやさしく媚て、誠に、かゝる山の奥にも、かゝる人有けるよ。<u>しらず、神仙の住居かとあ</u>

3　『玉すだれ』「柳情霊妖」の典拠については、木越治「『玉すだれ』をめぐって」（日本文学協会『日本文学』第31号、1982年）および松村恒「Analecta Anglica：XII.――Hearniana：「青柳のはなし」に用いられた漢詩」（神戸親和女子大学英語英文学会『神戸親和女子大学英語英文学』第17号、1997年）が『雲渓友議』巻上「襄陽傑」だとする。そして、朴蓮淑「『多満寸太礼』と『新語園』」（日本文学協会『日本文学』第48号、1999年）は、前掲木越論文と花田富二夫「『新語園』と類書――了意読了漢籍への示唆」（日本近世文学会『近世文芸』第34号、1981年）を踏まえた上で、『太平広記』巻四二九「申屠澄」（出『河東記』）が浅井了意編『新語園』に抄録され、それに依拠するとする。

4　『玉すだれ』のテキストについては、富山大学ヘルン文庫所収『玉すだれ』（ヘルン文庫配架番号2164-2169）を参照しつつ、文字の読み取りについては前掲平川書によった。ただし、文字の囲みは省略した。なお、ヘルン文庫所収『玉すだれ』については富山大学機関レポジトリにて公開されている。

やしまる。

（『玉すだれ』巻三、14丁オ）

老夫婦は友忠を歓待し、友忠は馬を留めて一夜の宿を借りることになる。娘は装いを新たにして友忠の前に再び姿を現す。友忠が娘に盃を勧めると、老夫婦は娘を引き寄せ、囲炉裏端に座らせる。友忠が「何となく」和歌を口ずさむと、娘は見事な返答の和歌を読み、感動した友忠は老夫婦を通じて娘に求婚する。

友忠と娘が結ばれた翌日、友忠は別れを惜しみ、「又逢うまでの形見」として一包みの金を渡そうとすると、老夫婦は娘を連れて行くように頼んだ。友忠は娘を馬に乗せ、老夫婦のもとを後にした。（※）（ハーンのいう「断絶」はここにある――注）

その後、山名細川の両陣は敗北し、友忠は主君の義統にしたがって上洛する。都の東寺に宿陣があり、友忠は宿陣に娘を隠していたが、室町幕府の管領細川政元によって娘を奪われ、娘は政元の寵愛を受けることになる。友忠は無念のなか、娘を思いつづけ、娘に宛てて文を書き、末尾に次のように書いた。

公子王孫逐後塵
緑珠垂涙滴羅巾
侯門一入深如海
従是蕭郎是路人

（『玉すだれ』巻三、16丁オ、16丁ウ）

友忠が娘に宛てた詩が政元の目に留まることになり、友忠は呼び出された。「折もよくハ恨の太刀一かたなにと思ひつれて」政元のもとに向かった友忠であったが、政元は涙を流しながら、友忠の詩を口ずさみ、友忠の手を取って、婚礼の引出物とともに娘を友忠とともに帰す。

その後、夫婦の情はいっそう深まり、五年の月日が流れたある日、妻が突然、次のように言い出した。

「吾はからずして君と五とせの契りをなす。猶いつまでも八千代をこめむと思ひしに。ふしぎに命こよひに究まりぬ。宿世の縁を思ひたまハゝ。跡よく弔ひ給へ。」

（『玉すだれ』巻三、16丁ウ、17丁オ）

妻はそう言うと、滝のような涙を流し、次のように続けた。

「今ハ何をかつゝみ候ハん。ミづからもと人間の種ならず。柳樹の精はからすも。薪の為に伐れて。已に朽ちなむとす。今ハ歎にかひなし」

（『玉すだれ』巻三、17丁オ）

妻はそう言い残すと、その身体は霜の消えるように消え去り、着ていた小袖だけが残った。

友忠は「天にこがれ地にふして」悲しんだが、妻の面影は夢にさえも出てこなかった。その後、友忠は出家し、諸国修行の旅に出て、妻の実家のあった場所をたずねると、家はすでになく、ただ大きな柳の切り株三本があっただけであった。

本稿冒頭にあげたハーンのいう「断絶」は、友忠が娘をともなって老夫婦の元を去った後にあたる（上述の（※）部分）。「柳情霊妖」について、この「断絶」をもとに前半・後半の展開を分けるとすれば、次のようにまとめることができる。

前半：友忠と娘が結ばれるまで
後半：娘が細川政元に奪われたのち返還され、娘の正体が明らかにされるまで

この前半部分と後半部分の「断絶」については、さまざまな見方がある。たとえば、木越論文（５頁）は次のようにいう。

前半の青柳に会い京に連れていく話と、崔郊の話に拠った後半とがあまりうまくつながっていない……他にもこうした例があり、どうもこの作者（『玉すだれ』作者、辻堂非風子のこと――注）には典拠を尊重する余り、構成上の破綻も気にしないところがあったようである。

一方、平川書（340頁）の指摘は次の通りである。

ハーンは、作中で、この後、日本の原作は友忠の母や青柳の両親や主君畠山義統の事が書かれず、つじつまが合わないと書いている。しかし母のことはともかく、青柳の両親の事は最後の場面があるかぎり、必ずしも書く必要がないし、畠山義統の

ことは、山名細川両陣が破れた後、義統が上洛して都東寺に宿陣していると書かれている。原話に従っても、特につじつまが合わないとは思われないが、主君の許可なく妻を娶ったという点をハーンは気にしたのだろうか。

つまり、『玉すだれ』には「構成上の破綻」があるとする見解（木越論文）と、特段の問題はないとする見解（平川書）の、二通りがあることがわかる。このように見解が分かれた理由は、「柳情霊妖」を複数のモチーフ――あるいは物語構成要素と言い換えることも可能であろう――が集合してできた一つの物語として読むか、あるいは「柳情霊妖」それ自体が完結した一つの物語と考えて読むか、この違いによるものではないだろうか。

木越論文の目的は『玉すだれ』所収作品の典拠を探究することにある。事実、同論文では「柳情霊妖」について、前半の典拠を『情史類略』巻二十四「柳妖」あるいはそのほかの説話にあるのではないかとし、後半の典拠を『雲渓友議』に求めている（この点については後述する）。それに対して、平川書の目的は「青柳の話」の原話としての「柳情霊妖」を紹介することにあり、同書には「柳情霊妖」の典拠を探究するような記述はない。このように、両者では「柳情霊妖」に対する研究のスタンスが異なるのであり、そのために相反する見解を生み出すこととなったのであろう。

本稿では、木越論文およびそれに依拠する朴論文の考察に立脚したうえで、前半部分（友忠と娘が結ばれるまで）と後半部分（娘が細川政元に奪われたのち返還され、娘の正体が明らかにされるまで）のそれぞれの典拠について考察をすすめたい。

2、「柳情霊妖」の典拠について

（1）「柳情霊妖」前半の典拠

木越論文（5頁）は、「柳情霊妖」前半の典拠について次のようにのべる。

前半の柳の精が人と交わる話の方は、南方熊楠の「人に化けて人と交つた柳の精」（平凡社版全集4所収）によれば、『裏見寒話』（未刊随筆百種新版第9巻所収）追加や「木魂聟入」の昔話のなかに何例がみられる。が、大部分は男の精であり女の精は少ない。『情史類略』巻二十四「柳妖」などがヒントかもしれないが、もっと近い話がありそうな気がする。

同論文は「大部分は男の精であり女の精は少ない」と指摘するが、「柳の精が人と交わる話」に属する昔話に「木霊女房」（IT231）がある。「木霊女房」では柳の精は女である[5]。また、木越論文が別の可能性としてあげる『情史類略』巻二十四「柳妖」は、陶希侃という青年と柳の精の娘との交わりについて書かれたもので、男女の詩のやりとりの場面があるなど、「柳情霊妖」との類似点もいくつか指摘することはできる。ただし、「木霊女房」および『情史類略』「柳妖」ともに、同論文が「もっと近い話がありそうな気がする」というように、「柳情霊妖」の典拠とするには、青年が老夫婦から娘をもらい受ける、異類が衣服を脱着して変身をするといった、「柳情霊妖」を構成する重要モチーフが見あたらない。そのため、「木霊女房」型の昔話や『情史類略』「柳妖」については、「柳情霊妖」の異類の女の正体として柳が選ばれた理由にはなり得るが、「柳情霊妖」の典拠とするには根拠が不十分なように思われる。「柳情霊妖」前半の典拠については、むしろ朴論文（24-25頁）が指摘する唐代の筆記小説集『河東記』「申屠澄」との関連を考えた方が合理的なのではないだろうか。

この『河東記』についてはすでに散逸し、現在見ることができるのは『太平広記』等に引用されたものである。ここでは、『太平広記』巻四二九「申屠澄」（出『河東記』）の前半の梗概を示す[6]。

申屠澄は、赴任先に向かう途中、大雪に遭い、路端の民家に泊めてもらうことにした。そこには、老父と老母、そして十四、五歳の娘が座っていた。娘は、髪はみだれ、服も汚れていたが、白い肌に花のようなかんばせであった。申屠澄は、老夫婦に勧められ、囲炉裏端に座っていると、奥から着物を替えて、化粧をし、粧いを新たにした娘がやってきた。娘は先にも増して美しかった。母が酒壺を持ってきて、四人で酒令をすることになった。さりげなく娘を試した申屠澄であったが、娘の機転の効いた返しに感動し、老夫婦に娘をもらい受けたいと懇願する。老夫婦もそのことを了承し、申屠澄に婿として遇し、申屠澄がわたそうとした金品は一切受け取らなかった。翌日、申屠澄は娘を連れて、老夫婦に別れを告げて、赴任先に向かった[7]。

5　稲田浩二『日本昔話通観　研究篇１』（同朋舎、1993年）287頁参照。

6　『太平広記』については、汪紹楹校勘『太平広記』（中華書局、1981年第２刷・第１刷は1960年）によった。

7　「申屠澄」の訳注については、赤井益久・岡田充博・澤崎久和「『河東記』訳注考（七）」に（名古屋大学中国文学研究室『名古屋大学中国語学文学論集』第33輯、2020年）107-77頁があり、本稿でも作品理解にあたって参考にした。

青年が娘を見染めるまでの展開は「柳情霊妖」とほぼ一致し、娘の容姿の描写も類似する。「柳情霊妖」が『河東記』「申屠澄」から影響を受けたことはたしかであろう。

『河東記』は南宋末以降散逸し、原書は伝わらないが[8]、『河東記』所収の小説作品は10世紀成立の『太平広記』に引用されて残っている（図１参照）。また、「申屠澄」については、その後、『太平広記』以外にも宋末元初の『事文類聚』続集巻十四、および明代の『虎薈』巻四、『天中記』巻四十四、『蜀中広記』巻八十などの類書・小説筆記集にも引用された。

「申屠澄」の日本伝播の時期は不明であるが、天和二年（1682）出版の浅井了意撰『新語園』巻六に「申屠澄娶虎妻」と題する説話が収録されている[9]。

「申屠澄娶虎妻」における、申屠澄が娘の家に至るまでの次第を次にあげる（ルビは原典に記載のもの。また、句読点は引用者による。）。

> ……風暴（アラ）ク雪（ユキ）大ニ降（フリ）テ、大寒膚（ハダエ）ヲ徹（トヲ）シ、馬泥（ムマナズミ）テ進マズ。路ノ旁（カタワラ）ニ茅舎（カヤヤ）ノ中チ、煙（ケフリ）ヲ薫（フスベ）テ温煦（ウンクン）トアタタカナリ。屠澄（トテウ）馬ヲ寄（ヨセ）テ見レハ、嫗老夫（ウバオウヂ）及ヒ十六七ノ処女（ショジョ）ト只三人焼火（タキビ）ヲ環（メクリ）テ座ス。其女蓬（ムスメヨモギ）ノ髪（カミ）乱レテ垢（アカ）ヅケル衣ノ裙（スソ）ハ短（ミチカ）シト雖トモ、花ノ臉（マナジリアラタ）新ニ美（ウルハ）シク、雪ノ肌（ハダエマサ）方（イツ）ニ麗クシ、身ノ挙動（コトウヤサシ）妍（コビ）ク媚（マコト）テ、寔（カ）ニ懸（カ）ル山ノ奥（オク）ニモ、是レ有リケリト。此世ノ人トモ覚エズ、神仙ノ居スル所、麻姑（マコ）カ棲（スミカ）ヲ見ルカ如クニ思フ。……

『太平広記』「申屠澄」中の「……遇風雪大寒、馬不能進。路旁茅舎中有烟火甚温煦、澄往就之、有老父嫗及處女環火而坐。其女年方十四五、雖蓬髪垢衣、而雪膚花臉、舉止妍媚。父嫗見澄来……」（以上原文）と上掲の文を比較すると、「申屠澄」の表現が「申屠澄娶虎妻」にもほぼそのまま踏襲されていることがわかる。

『新語園』は複数の漢籍から中国の故事説話を摘出し、仮名まじり文に訳出したもので、それらの故事説話は『太平広記』、『事文類聚』、『天中記』等に依拠する[10]。これら

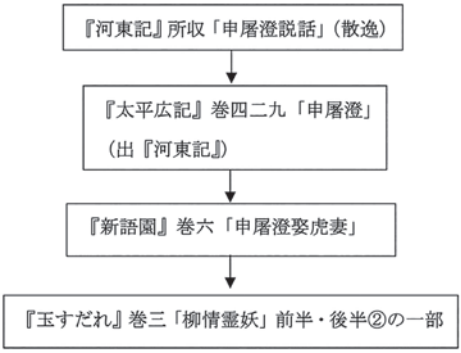
8　陸游『老学庵筆記』巻一〇にその名が見えることから、南宋の末頃までは流布していたとされる。なお、『河東記』の日本伝播については岡田充博『唐代小説「板橋三娘子」考』（知泉書店、2012年）に考察がある。また、同書98頁・注（23）に「申屠澄」の日本伝播に関する考察がある。

9　『新語園』所収の浅井了意の自序に延宝九年（1682）２月との記述があり、刊記によって天和二年（1682）二月の出版とわかる。『新語園』のテキストについては吉田幸一編『新語園』上・下（古典文庫、1981年）によった。

10　花田富二夫「『新語園』と類書――了意読了漢籍への示唆」（日本近世文学会『近世文藝』第34号、1981年）は『新語園』所収の故事説話について出典調査を行い、35頁下において「巻一から巻四まではその大半を『天中記』に、巻五、巻六、巻八は『太平広記』に典拠を依拠しているこ

類書・説話集に引用された「申屠澄」説話のうち、『天中記』巻四十四および『事文類聚』続集・巻十四の記載は、申屠澄が娘およびその家族と酒令に興じる場面が抜き書きされているだけであり、『新語園』「申屠澄娶虎妻」については『太平広記』を参照した可能性が高い（末尾付録資料１「前半部分」を参照）。

図１　「柳情霊妖」前半・後半②の伝播



ただし、傍線を付した「神仙ノ居スル所、麻姑カ棲ヲ見ルカ如クニ思フ。」の表現は、現行の『太平広記』テキストには見えず、また『事文類聚』、『天中記』等の類書にも見えない。『太平広記』「申屠澄」日本伝来の際に、現行テキストとは異なる『太平広記』版本が日本に伝わっていて、それを元にして浅井了意が書き加えたのか、あるいは浅井了意が『新語園』撰述の際に付け加えたのかは不明である。ただ、上述の『玉すだれ』「柳情霊妖」にも「しらず、神仙の住居かとあやしまる。」とあり（「１、「青柳の話」原話とその「断絶」について」の傍線部分参照）、類似する。

なお、「申屠澄」は明和七年（1770）刊行の鳥飼酔雅『近代百物語』で「狐の嫁入り出生の男女」と題する狐女房譚に仕立て直されている。ここでも、娘の家を「山中にかゝる人のある事、此世の人ともおもわれず、神仙のすまゐかとあやしまれける」と表現していて、『新語園』もしくは『玉すだれ』の影響を受けたと思われる[11]。この「狐の嫁入り出生の男女」と「申屠澄」の後半部分の関係については後述する[12]。

（２）「柳情霊妖」後半の典拠（その１）

「柳情霊妖」の後半部分は、浅井了意撰集『新語園』巻二「感詩帰妾」を参照したも

とが判る。そして、『事文類聚』、『太平御覧』は補佐的な立場で『新語園』構成に参画している。」と述べる。また、王建康「『太平広記』と近世怪異小説――『伽婢子』の出典関係及び道教的要素」（慶應義塾大学藝文学会『藝文研究』第64号、1993年）２頁は、『新語園』が『太平広記』より引用した文献は花田論文が指摘する15話をはるかに上回り、141話に達したとする。いずれにせよ、『新語園』撰集の際に『太平広記』が典拠となったことは確実であり、「申屠澄娶虎妻」についても『太平広記』が典拠となった可能性が高い。

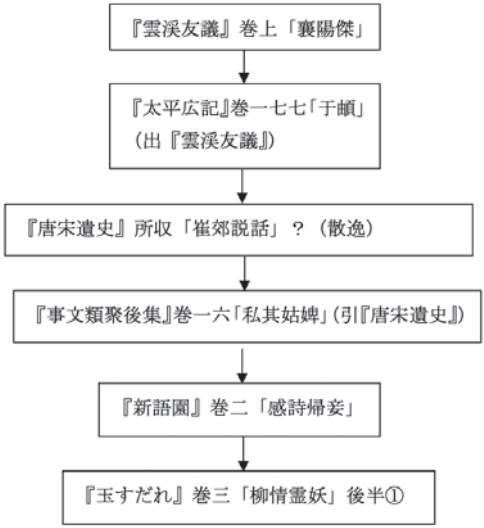
11　『近代百物語』「狐の嫁入り出生の男女」については太刀川清校訂『続百物語怪談集成』（叢書江戸文庫、国書刊行会、1993年）によった。

12　前掲岡田書98頁・注（25）指摘参照。

のとみられる[13]。さらに『新語園』「感詩帰妾」の典拠は唐末・范攄『雲渓友議』巻上「襄陽傑」であり、浅井了意は『新語園』の撰集に際して、『事文類聚』や『天中記』などの類書を参照したのであろう。

以上のことを総合すると、唐代筆記小説「襄陽傑」が宋代以降の類書・説話集に載り、それが『新語園』を経由して、『玉すだれ』「柳情霊妖」として翻案されたという一連の流れをたどることができる（図２参照）。

図２　「柳情霊妖」後半①の伝播



まずは『新語園』巻二「感詩帰妾」を次にあげる（括弧のないルビは原文による）。

崔郊秀才ハ漢（「漢」の誤りであろう――注）上ト云フ処ニ寓居シテ、文章ニ達ス。学問の間タニ物産皆罄テ貧ク成タリ。未タ妻モ無ク、舅ノ本トニ行キ通テ、其ノ婢ヲ思ヒ初タリ。婢ハ容姿美麗ニシテ亦能ク音律ノ調ヲ善知テ漢南ノ地ニハ名ヲ得タル女ナリ。舅亦タ貧匱ニシテ婢ヲ出シテ連師（「連帥」の誤りであろう――注）某カ家ニ鬻遣ス。連師甚ハタ寵愛シテ給銭四十万ヲ与フ。崔郊思ヒ慕テ忘ルヽ時ナン余リニ堪テ通路ノ人ヲ求メ願ハ此ノ世ニ生テアル間タニ今一タヒ相見ハヤト云ヒヤリケレハ、婢モ亦タ往初ノ情ヲ忘レカネテ云ヒオコセケルハ、寒食ノ日、東の冢野辺ニ出ベシトアリ。崔郊悦テ其日ヲ待テ微明ヨリ往向フ柳ノ陰ニ立テ居ケレハ、婢已デニ出来り。互ヒニ涙ヲ流シテ誓ヲ立テヽ別ルヽ時、崔郊詩ヲ贈リテ曰「公子王孫逐後塵、緑珠垂涙滴羅巾。侯門一入深如海、從此蕭郎是路人。」ト云フ。或人崔郊ガ此ノ詩ヲ以テ連帥ニ覩セタリ。連帥密ニ崔郊ヲ召テ言ベキコト有ト云フ。左右ノ人更ニ其ノ意ヲ測知ラズ。如何サマ用アルコトヽ謂アヘリ。崔郊モ思ヒ寄ズ召ルヽハ、此詩ヲ見テ怒尤メハ、如何ナル責ニカ遇ベキト、先ヲ悔ミ今ヲ畏ルト

13　前掲木越論文４頁-５頁および前掲松村論文61-62頁も同様の見解に立つ。

雖トモ遁ヘキ所ナク往到ル。連帥出テ合テ、崔郊カ手ヲ握リテ曰ク、「侯門一タビ入テ深コト海ノ如シ、此レヨリ蕭郎是路人ト云フ詩ノ句ハ是尓ノ製作ナリヤ。感心ノ秀句ナリケリ。四十万銭ハ些小ノ物ナリ。何ゾ惜ニ足ンヤ。」トテ、券契ヲ破リテ婢ヲ出シテ崔郊ニ与ヘ、同ク漢上ニ帰ラシメ剰サヘ帷帳匣マデ増飾テ送リ遣ス。猛キ士ト雖トモ一聯ノ詩句ヲ感シテ情ノ深キ意ヲ起ス。文道ノ徳ナリト云フ。

崔郊という貧しい青年が愛する娘を権力者「連師（ママ）某」に奪われ、その思いを詩にしたためる。権力者はその詩を見て感動し、娘が返還される。青年が娘への思いを詩にしたため、権力者がそれを見て娘を返すという、ストーリーの全体的な流れは「柳情霊妖」後半部分と共通する。傍線を引いた部分は崔郊が娘に送った詩であり、詩の語句は「柳情霊妖」で友忠が娘に送ったものと一字一句すべて同じである。

上述の花田論文（21頁）は、『新語園』「感詩帰妾」について『事文類聚』後集巻一六「私其姑婢」（引『唐宋遺史』）に依拠すると推測する。その内容は「感詩帰妾」とほぼ同一である[14]。この『事文類聚』後集「私其姑婢」が典拠とする、北宋中期成立の『唐宋遺史』は散逸していて、『唐宋遺史』がどの文献に拠ったのかは不明である。ただ、『事文類聚』後集「私其姑婢」について、『太平広記』巻一七七「于頔」（出『雲渓友議』）および『雲渓友議』現行テキストと見比べると、単行本『雲渓友議』の方が語句などの点において共通点が多い[15]。そのことから、おそらくは単行の『雲渓友議』所収の「襄陽傑」が典拠ではないかと考えられる[16]。

『雲渓友議』「襄陽傑」は唐末の権臣于頔にまつわる三種のエピソードを集めて一話としたものであり、『太平広記』ではそれを「器量」に収録する[17]。『事文類聚』後集「私

14　『事文類聚』後集巻一六「私其姑婢」の本文を以下に示す（傍線は引用者、注16も参照）。崔郊居漢上。其姑有婢端麗、善音律。郊嘗私之。既貧鬻婢於連帥、于頔家給銭四十一万。寵盻弥深、郊思慕無已。其婢因寒食来従事家、値郊立於柳陰、馬上漣泣、誓若山河。崔生贈之以詩曰「公子王孫逐後塵、緑珠垂泪湿羅巾。侯門一入深如海、従此蕭郎是路人。」或有嫉郊者、写詩於座、公覩詩、令召崔生、左右莫之測也。及見郊握手曰「侯門一入深如海、従此蕭郎是路人。便是公作耶。」遂命婢同帰、至於帷幌奩匣、悉為増飾之。『唐宋遺史』

15　『事文類聚』後集「私其姑婢」と単行本『雲渓友議』と共通する箇所については、前掲の注（15）の傍線箇所を参照。

16　『雲渓友議』については唐雯校箋『雲渓友議校箋』（唐宋史料筆記・中華書局、2017年）によった。ただし、同本は明刊本の『雲渓友議』などをもとに『雲渓友議』を再構成したものであり、『太平広記』のテキストの方が原『雲渓友議』に近い可能性もある。『唐宋遺史』が拠り所としたのが、『太平広記』もしくは単行の『雲渓友議』のいずれであったのかについては今後の課題としたい。

17　『雲渓友議』「襄陽傑」および『太平広記』「于頔」の全体構成は次の通り。①鄭太穆が、銭一千貫、絹一千疋ほかを求めて、于頔に手紙を寄こしたものの、その文面は大変傲慢であった。

其姑婢」は、「襄陽傑」から崔郊の詩に関するエピソードにあたる部分のみを抽出したものである。『太平広記』の分類にもある「器量」とは才能があり、かつ心の広いことを指し、『太平広記』の題名には「于頔」の名が冠されていることからも示しているように、この説話の本来の目的は于頔の才能や度量の広さを顕彰することにあったのだろう[18]。それが『唐宋遺史』が成書した北宋中期になると、説話の主題は、于頔の「器量」を伝えることから崔郊の詩才を伝えることへと変化した[19]。つまり、『唐宋遺史』は「于頔説話」から「崔郊説話」を生み出し、『事文類聚』後集への橋渡し的役割を行なったことになる。

この『事文類聚』の編者は複数いるとされ、そのうち『事文類聚』後集については、南宋の祝穆の手による[20]。その後、日本へは明刊本や朝鮮刊本が伝来し、寛文六年（1666年）、菊池耕斎（1618～1682年）による附訓本が出た[21]。

于頔はそれを見て、鄭太穆が求める半分の量の財物しかやらなかった。②符載山人が三尺の童子に数幅の書をもたせて于頔の元に行かせ、童子は于頔に銭百万を求めた。于頔はそれらを与えたうえに、紙や墨、衣服なども与えた。「襄陽傑」では、①および②の逸話のあとに、崔郊詩話が続く。

18　西上勝「情史の発生――『太平広記』巻二七四「情感」をめぐって」（中文研究会『未名』第17号、1993年）11頁は『雲渓友議』「襄陽傑」について「……物語の焦点は他人の愛妓を奪う非を認識する于頔の潔さにあり、『雲渓友議』の標題が「襄陽傑」といい、『太平広記』がそれを巻一七七「器量」に配置するのはそのためだ。」（原文は旧字体）と述べる。なお、『雲渓友議』「襄陽傑」の締めくくりに、雲渓子の言として「王敦女楽を駆りて以て軍士に給ひ、楊素徐徳言の妻を帰す。財に臨みて貪ること莫かれ。色に怯（おじま）ざる者罕（まれ）なり。時人用て雅談と為す。歴く国朝の挺特する英雄を観るに、未だ于襄陽公の如き者有らざるなり。……」とある。ここでいう「楊素徳言の妻を帰す」とは『本事詩』「徐徳言」の説話を指す。「徐徳言」に見える、再会を誓い合った男女が離散したのち、権力者の義侠心によって妻が返されるというモチーフは、これが生まれた中国でも、また日本でも広く伝承された。日本では早くは『大和物語』「蘆刈」に見え、日向一雅「大和物語「蘆刈」譚論」（『源氏物語の準拠と話型』、至文堂、1999年）や新見一美「大和物語蘆刈説話の原拠について」（『平安朝文学と漢詩文』和泉書院、2003年・『甲南大学紀要』文学篇第80号、1991年初出）などの先行研究がある。『玉すだれ』「柳情霊妖」、あるいはこれの原拠である『新語園』巻2「感詩帰妾」もその系譜に属する。

19　『唐宋遺史』については、『宋史』巻二〇三・藝文志にも「詹玠唐宋遺史四卷」とあるほか、王応麟『玉海』巻47は、『唐宋遺史』の成書時期を北宋の治平4年（1067）と記す。

20　『事文類聚』は後集以降、元・富大用によって新集と外集が、元・祝淵によって遺集が編集された。後集のことは、『四庫提要』子部四五・類書類一に「案此書為元代麻沙版。前後続別四集。皆宋祝穆撰。」と見える。また、『事文類聚』の成立については、栃尾武『類書の研究序説（三）――五代十国宋代類書略史承前――』（成城大学『成城国文学論集』第12号、1980年）178～180頁に考証がある。

21　菊池耕斎は藤原惺窩（1561～1619年）の門流をくむ薩摩藩儒であり、漢籍に訓点を施したことで知られる。住吉朋彦「和刻本『事文類聚』考――その本文と、菊池耕斎の附訓について――」（『和漢比較文学』第48号、2012年）97頁上段は、耕斎は『事文類聚』（正式には和刻本『新編古今事文類聚』）に訓点を施すに際して、自らが蔵していた六集の明本（建陽系統）と書肆の八尾友久がもたらした七集の明本（明末の徳寿堂刊本）の両本を参照できたと、指摘する。浅井了意

浅井了意が『太平広記』「于頔」をもとにして『新語園』「感詩帰妾」を撰述した可能性も否定できないものの、話型の構造や語句の共通点などを踏まえると、「感詩帰妾」の典拠は『事文類聚』後集の可能性が高い（末尾付録資料１「後半部分」を参照）。

（３）「柳情霊妖」後半について（その２）

「柳情霊妖」後半のストーリー展開について、より詳細に区分すると、次のように分けることができる。

①娘が権力者に奪われ、返還される
②娘の正体が明らかになる

①については上述の通りであり、『雲渓友議』「襄陽傑」・『事文類聚』後集「私其姑婢」・『新語園』「感詩帰妾」（以下、これら崔郊に関する説話を総称して「崔郊説話」とする）が踏まえられていることに間違いないだろう。

②は、娘が権力者から青年のもとに返され、青年は娘と正式に結婚し、偕老同穴を誓い合うも、妻が亡くなり、妻の正体が明らかになるまでを描く。ところが、「崔郊説話」では、権力者によって娘が男主人公に返還されることによって話が終わり、夫妻の結婚後の生活や妻の死亡について語られることはない。つまり、①のみが語られ②について語られることはなく、②については「崔郊説話」以外の、ほかの典拠があったのではないかとも考えられるのである。

②については、「柳情霊妖」前半の典拠としてあげた『太平広記』「申屠澄」（出『河東記』）あるいは『新語園』「申屠澄娶虎妻」（以下、これら「申屠澄」を典拠とする説話を総称して「申屠澄説話」とする）の後半部分が関連するとみられる。「申屠澄説話」の後半部分をすべてあげるには長いので梗概を示し、重要な場面のみを書き下しにして示す[22]。

申屠澄は役人勤めをしていたが、俸禄は少なかったため、妻は家名をあげるために尽力し、夫婦の愛情はますます強くなった。官吏としての任期が満了したころには、一男

が参照したものが明本だったのか、和刻本だったのかは不明である。

22　本来、唐代伝奇小説については原文と現代日本語訳を載せるべきであるが、江戸の読本との比較のために書き下しで示す。後述の「任氏伝」も同じ。また、『太平広記』「申屠澄」の書き下しに際しては、前掲赤井・岡田・澤崎論文を参照したが、一部、書き変えた箇所もある。

一女が生まれていた。ある日、申屠澄は妻に詩を贈ったものの、妻は返答の詩を詠もうとしなかった。申屠澄は官を辞して、一家で都に帰ることにした。その途中で嘉江の近くの泉で休憩したときに、妻はなにか思うことがあったのか、夫への返答の詩を詠んだ。その詩の内容がいつもと違っていたので、申屠澄は、妻は故郷が恋しいのだろうと思い、妻の実家に立ち寄ることにした。それから二十日あまりして妻の家に着いた。

以下、妻の実家の場面である。

> ……二十余日、復た妻の本家に至る。草舎依然たるも、但だ復た人有らず。澄と其の妻とは即ち其の舎に止まる。妻の思慕の深きこと、尽日涕泣す。壁角の故意衣の下に、一虎皮の、塵埃積満するを見る。妻之を見て、忽ち大いに笑ひて曰く、「知らず此の物尚ほ在らんとは」と。之を披れば、即ち変じて虎と為り、哮吼拏攫して、門を突きて去る。澄驚き走りて之を避け、二子を携えて其の路を尋ぬ。林に望みて大哭すること数日、竟に之く所を知らず。

「申屠澄説話」後半では、申屠澄と妻との結婚生活、そして、妻が虎皮を着て虎に変身し、山に去るまでの顛末が描かれる。妻がなんの前触れもなく――しかも夫が原因とも思われない理由によって夫のもとを離れることと、妻の正体が結末で明らかになる点において、「申屠澄説話」と「柳情霊妖」は共通する。だが、「柳情霊妖」の妻はその身が消失して、人衣（＝「小袖」）を残したのに対し、「申屠澄説話」の妻は虎皮を着て虎に変身する。このように、「申屠澄」と「柳情霊妖」はともに異類変身譚の要素を含みながらも、変身への着想が異なるように思われる[23]。

『太平広記』には「申屠澄」以外にも、女性が虎に変身する説話を数話収録する[24]。虎に変身する際、虎皮を着る・人衣を脱ぐ、このどちらかによって変身する。唐代の小説筆記において、女性が虎に変身する場合、虎皮を着て変身するパターンが主流であり、人衣を脱ぐ例はない。「申屠澄説話」における妻もまた、虎皮を着て変身をするものの、人衣を脱ぐ描写はない。

一方、「柳情霊妖」では、妻は柳の木肌を着ることで柳の正体をあらわしたのではな

23　虎皮を着脱することによって、人間と虎のあいだを行き来する変身譚については、島森哲男「中国の人虎変身譚―「脱ぐ／着る」の民話学（その二）―」（宮城教育大学『宮城教育大学紀要』第53巻、2019年）に考察があり、以下「申屠澄説話」の変身について同論文405頁を参照。

24　巻四二六「袁双」（出『五行記』）、巻四二六「黄乾」（出『五行記』）、巻四二七「天宝選人」（出『原化記』）、巻四二九「申屠澄」（出『河東記』）、巻四三三「崔韜」（出『集異記』）がある。前二者が六朝の例、後三者が唐代の例である。

く、人衣を脱ぐことによって人間ではいられなくなった。これは「人衣を脱ぐ」パターンであり、「申屠澄説話」とは反対である。「申屠澄説話」における「虎皮を着る」変身を模倣したのは上述の『近代百物語』「狐の嫁入り出生の男女」の方だといえるだろう。同話では、妻が実家に残されていた狐皮を着て狐に変身する[25]。

「柳情霊妖」では、異類妻の着ていた小袖だけが残され、その身は消失する。そのことによって、妻は人間ではなくなるとともに、命を落とし、残された夫は悲しみに暮れる。「柳情霊妖」の、この場面と共通点が多いのは唐代伝奇小説の白眉「任氏伝」の結末ではないだろうか。

「任氏伝」は唐代中期の沈既済による狐女房譚である。任氏は狐でありながらも、鄭六（あるいは鄭生）に愛され、鄭六のいとこ・韋崟とは男女の仲を超えて友人関係を結んだ。ところが、鄭生が赴任先に向かうのに同行した際に猟犬に正体を見破られ、落命する。任氏が猟犬に追われて亡くなる場面を『太平広記』巻四五二「任氏」より引く[26]（ルビおよび傍線は引用者による）。

> ……蒼犬草間より騰り出づ。鄭子は任氏の欻然として地に墜ち、本形に復りて南に馳すを見る。……里余にして、犬の獲る所と為る。鄭子銜涕し、囊中の銭を出し、贖ひて之を瘞むを以てし、木を削りて記と為す。其の馬を廻り覩れば、草を路隅に嚙む。衣服悉く鞍上に委てられ、履襪猶ほ鐙間に懸りて、蟬蛻の若く然り。唯だ首飾のみ地に墜つ。余は見る所無し。……

任氏は元の姿をあらわし、最後は犬によって殺される。馬上には任氏の服がかかり、鎧（乗馬する際に足をかける馬具）には履物や足袋が残され、蝉の抜け殻のようであり、ただ首飾りだけが地面に落ちていた。

散文作品としての「任氏伝」が日本に渡来した時期については定かではない。ただ、「任氏伝」の内容を韻文化した白居易「任氏行」（あるいは「任氏怨歌行」）は平安中期

25　「狐の嫁入り出生の男女」における狐妻の変身の場面を次に示す（傍線は引用者による）。
“……玄之介も妻もおもひあまれるなみだはひめもそとゞまらず。壁にそひたるふるき衣を、これやかたみと引きあぐれば、其下にきつねの皮あり。ちりつもりて久しく埋れたるがごとくなるを、妻これを見て、大きにわらふて、「此物なをありといふ事をしらざりき」と、やがてこれを着るにたちまちへんじてきつねとなり、こんくとほへて門に出てはしりける。玄之介はおどろき、かなしさも恋しもさめはて、二人の子どもをたづさへ道を尋ねてかへり行きける。……”

26　書き下しにあたっては竹田晃・黒田真美子編『中国古典小説選５』（明治書院、2006年）26-58頁を参照した。ただし、一部書き換えた箇所がある。

には日本に伝来していた[27]。そして、この任氏の物語が『源氏物語』帚木三帖における空蟬の人物描写に共通点が多いことは先行研究で論じられている[28]。

空蟬は、寝所にしのび寄る光源氏を拒絶し、小袖を残して、ほかの女を身代わりにすえた。光源氏は「空蟬の身をかへてける木のもとにはなほ人がらのなつかしきかな[29]」と歌を詠み、空蟬を懐かしむ。男の元を去った女を懐かしむ構造は、妻が虎になったことを悲しむ申屠澄、任氏の死を悲しむ鄭六等々、複数の典拠を踏まえながら、「柳情霊妖」で友忠が異類妻の死を弔う情景に継承される。このように、「柳情霊妖」における妻の正体の露見と夫の元を去る妻の描写は、唐代小説筆記やそれを継承する日本の古典など、さまざまな要素が含まれ、特定の一作品にその典拠を求めることは不可能なように思われる。

おわりに

ハーンが、『怪談』「青柳の話」の途上、「日本語原話には話の途中に奇妙な断絶があり……」と述べるように、「青柳の話」の原話にあたる『玉すだれ』「柳情霊妖」はいくつもの唐代小説筆記および日本文学作品が複雑にからまり合って構成されている。

「柳情霊妖」の成立については、朴論文が指摘するように『新語園』との影響関係を抜きにして語ることはできない。『新語園』は、『太平広記』および『事文類聚』などの類書から「申屠澄説話」や「崔郊説話」を引き、『新語園』所収の「申屠澄説話」と「崔郊説話」が『玉すだれ』「柳情霊妖」創作への素材提供の役割を果たした。

また、「柳情霊妖」において異類妻が着ていた小袖だけが残されて亡くなる場面については「任氏伝」との影響関係を指摘したが、『新語園』には「任氏伝」に関係する小

27　白居易「任氏行」は散逸し、大江維時（888～963）撰『千載佳句』に二聯載るほか、南宋の類書『錦繍万花谷』に別の二聯四句が残るだけである。ただ、円仁（794～864）の購書目録『慈覚大師在唐送進録』に「任氏怨歌行一帖　白居易」とあり、このことから当時、日本に将来されたと推測される。なお、「任氏行」の日本伝来については、太田晶二郎「白氏詩文の渡来について」（『太田晶二郎著作集』第一冊所収、吉川弘文館、1991年、論文の初出は1956年）および静永健「白居易「任氏行」考」（九州大学『文学研究』第104号、2007年）を参照した。

28　『源氏物語』形成にあたり、「任氏伝」およびその他中国の小説が素材提供の役割を果たしたことについては川口久雄「源氏物語の素材における中国伝奇小説その他の投影」（『三訂 平安朝日本漢文史の研究　中篇』所収、1982年、初版は1959年。）、および新間一美「もう一人の夕顔――帚木三帖と任氏の物語――」（中古文学研究会『源氏物語の人物と構造』（論集中古文学５）、笠間書院、1982年）を参照。特に、以下の論考はこれら先行研究によるところが大きい。

29　『源氏物語』については、柳井滋・室伏信助・大朝雄二・鈴木日出男・藤井貞和・今西祐一郎校注『新 日本古典文学大系19 源氏物語 一』（岩波書店、1993年）による。

説筆記は見えない。このことから、「柳情霊妖」の成立が必ずしも『新語園』のみに起因するものではなく、唐代小説筆記の影響を受けたとみられる『源氏物語』空蝉の物語等、日本古典をも含めたさまざまな典拠を踏まえているといえるだろう。

最後に指摘しておきたいのが、「柳情霊妖」と「青柳の話」に見える、細川政元が涙を流しながら友忠を迎える場面についてである。じつは中国の「于頔説話」および「崔郊説話」において、権力者にあたる人物――于頔は、崔郊の詩に感動こそすれ、涙は流さない。たしかに「申屠澄説話」において、妻がいなくなったことで、申屠澄がかなしみの涙を流す場面はあるが、それは感動のためではなく、悲しみによるものであり、しかも申屠澄は一人で泣く。それに対して、細川政元は人前で泣く。権力者が人前で感動の涙を流すシチュエーションは、ここにあげた中国側の小説筆記には見えない。

日本文学には、このような人前における「男泣き」の場面があり、『古事記』におけるヤマトタケル、『源氏物語』の光源氏も人前で泣く[30]。この「男泣き」の要素は、中国の「于頔説話」および「崔郊説話」にはなかったものであり、日本で加わったものであろう。ギリシャ生まれのハーンもまた、「柳情霊妖」の細川政元の涙の描写を踏襲し、「青柳の話」で細川政元に「優しい涙」を流させた。

ハーンは、複雑に結ばれた日中諸説話に横たわる「断絶」を見抜き、「青柳の話」として、より洗練された作品を生み出した。そこにハーンの慧眼があるのだといえよう。

30　日本文学における「男泣き」については、丸谷才一「男泣きについての文学論」（『群像』第38号、講談社、1983年）に考察がある。

○付録資料１

『玉すだれ』「柳情霊妖」の前半部分および後半部分について、その関係資料をしめす。

前半部分（『太平広記』巻四二九「申屠澄」（出『河東記』）・『天中記』巻四十四「婪尾盃」・『事文類聚』続集巻十四「藍尾酒」）

※「柳情霊妖」前半のストーリーと関係のある箇所は一重線を施し、後半のストーリーと関係のある箇所は二重線を施した。

『太平広記』巻四二九「申屠澄」（出『河東記』）	『天中記』巻四十四	『事文類聚』続集巻十四「藍尾酒」
申屠澄者、貞元九年、自布衣調濮（明鈔本「濮」作「漢」）州什邡（明鈔本「邡」作「邦」）尉。之官、至真符縣東十里許遇風雪大寒、馬不能進。路旁茅舍中有烟火甚溫煦、澄往就之、有老父嫗及處女環火而坐。其女年方十四五、雖蓬髪垢衣、而雪膚花臉、舉止妍媚。父嫗見澄来、遽起曰「客衝雪寒甚、請前就火。」澄坐良久、天色已晚、風雪不止。澄曰「西去縣尚遠、請宿於此。」父嫗曰。苟不以蓬室為陋。敢不承命。」澄遂解鞍、施衾幬焉。其女見客、更修容覩飾、自帷箔間復出、而閑麗之態、尤倍昔時。有頃、嫗自外挈酒壺至、於火前煖飲。謂澄曰「以君冒寒、且進一杯、以禦凝冽。」因揖讓曰「始自主人。」翁即巡行、澄當婪尾。澄因曰「座上尚欠小娘子。」父嫗皆笑曰「田舍家所有、豈可備賓主。」女子即回眸斜睨曰「酒豈足貴。謂人不宜預飲也。」母即牽裙、使坐於側。澄始欲探其所能、乃舉令以觀其意。澄執盞曰「請徵書語、意屬目前事。」澄曰「厭厭夜飲、不醉無歸。」女低鬟微笑曰「天色如此、歸亦何往哉。」俄然巡至女、女復令曰「風雨如晦、雞鳴不已。」澄愕然歎曰「小娘子明慧若此。某幸未昏、敢請自媒如何。」翁曰「某雖寒賤、亦嘗嬌保之。頗有過客、以金帛為問。某先不忍別、未許。不期貴客又欲援拾、豈敢惜。」即以為託。澄遂修子壻之禮。袪囊以遺之。嫗悉無所取。曰「但不棄寒賤、焉事資貨。」明日、又謂澄曰「此孤遠無隣。又復湫溢、不足以久留。女既事人、便可行矣。」又一日、咨嗟而別。澄乃以所乘馬載之而行。既至官、俸祿甚薄、妻力以成其家、交結賓客。旬日之内、大獲名譽。而夫妻情義益浹。其於厚親族、撫甥姪、洎僮僕厮養、無不歡心。後秩滿將歸、已生一男一女、亦甚明慧、澄尤加敬焉。常作「贈内詩」一篇曰「一官慙梅福、三年愧孟光。此情何所喻、川上有鴛鴦。」其妻終日唫諷、似默有和者、然未嘗出口。毎謂澄曰「為婦之道、不可不知書。倘更作詩、反似嫗妾耳。」澄罷官。即罄室歸秦。過利州、至嘉陵江畔。臨泉藉草憩息。其妻忽悵然謂澄曰「前者見贈一篇、尋即有和、、初不擬奉示、今遇此景物、不能終默之。」乃吟曰「琴瑟情雖重、山林志自深。常憂時節變、辜負百年心。」吟罷、潸然良久、若有慕焉。澄曰「詩則麗矣、然山林非弱質所思、倘憶賢尊、今則至矣。何用悲泣乎。人生因緣業相之事、皆由前定。」後二十餘日、復至妻本家。草舍依然、但不復有人矣。澄與其妻即止其舍。妻思慕之深、盡日涕泣。於壁角故衣之下、見一虎皮、塵埃積滿。妻見之、忽大笑曰「不知此物尚在耶。」披之、即變為虎。哮吼拏攫、突門而去。澄驚走避之、携二子尋其路、望林大哭數日、竟不知所之。出『河東記』	〔婪尾盃〕申屠澄與路旁茅舍老父嫗及處女環火而坐、翁自外携酒壺至曰「此君冒寒、且進一杯。」澄因揖遜曰「始自主人。」翁即巡澄當婪尾。（『河東記』）蘇鶚云、今人以酒巡匝為婪尾。又云、婪、貪也。謂處於坐、未得酒。既貪婪之、故云。宋景文「守歲詩」云「迎新送故只如此、且盡燈前婪尾盃。」白樂天詩云「三盃藍尾酒、一堞膠牙餳。但改婪為藍耳。」或云「藍穎水、其深三丈、時人取之以為酒」又藍當作啉。侯白酒律云「酒巡匝、未坐者連飲二盃、為藍尾。末坐遠、酒行到常遲、故連飲以慰之。以啉為貪婪之意。（『石林燕語』）	白樂天元日封酒詩「三盃藍尾酒堞膠牙餳。」又云「老過占他藍尾酒、病餘收待到頭身。歲盞後推藍尾酒、春盤先勸膠牙餳。『荊楚歲時記』云「膠牙者、取其堅固如膠也。而藍尾之義、殊不可曉。」『河東記』載、申屠澄輿路旁茅舍老父嫗及處女、環火而坐、姫自外挈酒壺至、曰「此君冒寒、且進一盃。」澄因揖遜曰「始自主人。」翁即巡澄當藍尾。蓋以藍為婪、當藍尾者、謂最在後飲也。葉少蘊『石林燕語』云、唐人言藍尾多不同、藍字當作啉、出於侯白酒律、謂酒巡匝、末坐者連飲二盃、為藍尾。末坐遠、酒行到常遲、故連飲以慰之。以啉為貪婪之意、或謂啉為慓、如鐵入火、貴其出色。此尤無稽。則唐人自不能曉此。葉之說如此。于謂不然、白公三盃之句、只為酒之巡數耳、安有連飲者哉。侯白滑稽之語、見於啟顏錄。唐藝文志小白有啟顏錄十卷、雜語五卷、不聞有酒律之書也。蘇鶚『演義』亦引其說（『容齋隨筆』）

後半部分（『雲溪友議』巻上「襄陽傑」・『太平広記』巻一七七「于頔」（出『雲溪友議』）・『事文類聚』後集巻一六「私其姑婢」）

※「柳情霊妖」後半のストーリーと関係のある箇所に傍線を施した。

『雲溪友議』巻上「襄陽傑」	『太平広記』巻一七七「于頔」（出『雲溪友議』）	『事文類聚』後集巻一六「私其姑婢」
鄭太穆郎中為金州刺史、致書於襄陽于司空頔。鄭書傲倪自若、似無郡吏之禮。書曰「閤下為南溟之大鵬、作中天之一柱、騫騰則日月暗、搖動則山嶽頽、眞天子之爪牙、諸侯之龜鏡也。」太穆孤幼二百餘口、飢凍兩京、小郡俸薄、尚為衣食之憂、溝壑之期、斯須至矣。伏惟賢公、息雷霆之威、垂特達之節、賜錢一千貫、絹一千疋、器物一千事、米一千石、奴婢各十人。」且曰「分千樹一葉之影、即是濃陰。減四海數滴之泉、便為膏澤。」于公覽書、亦不嗟訝、曰「鄭使君所須、各依來數一半、以戎旅之際、不全副其本望也。」 又有巨廬符載山人、遣三尺童子、齎數幅之書、乞買山錢百萬。公遂與之、仍加紙墨衣服等。 又有崔郊秀才者、寓居於漢上、蘊積文藝、而物産罄懸。無何、與姑婢通、每有阮咸之從。其婢端麗、饒彼音律之能、漢南之最也。姑貧、鬻婢於連帥。連帥愛之、以類無雙。（無雙，即薛太寶愛妾、至今圖畫觀之。）給錢四十萬、寵眄彌深。郊思慕無已、即強親府署、願一見焉。其婢因寒食來從事家、值郊立於柳陰、馬上連泣、誓若山河。崔生贈之以詩曰「公子王孫逐後塵、緑珠垂淚滴羅巾。侯門一入深如海、從此蕭郎是路人。」或有嫉郊者、寫詩於于座。公覩詩、令召崔生、左右莫之測也。郊則憂悔而已、無處潛遁也。及見郊、握手曰「『侯門一入深如海、從此蕭郎是路人。』便是公製作也。四百千小哉、何靳一書、不早相示。」遂命婢同歸、至於幃幌奩匣、悉為增飾之、小阜崔生矣。初、有客自零陵來、稱戎昱使君席上有善歌者、襄陽公遽命召焉。戎使君豈敢違命、逾月而至。及至、	鄭太穆郎中為金州刺史。致書於襄陽于司空頔。鄭傲倪自若、似無郡使之禮。書曰「閤下為南溟之大鵬、作中天之一柱。騫騰則日月暗、搖動則山嶽頽。眞天子之爪牙、諸侯之龜鏡也。太穆孤幼二百餘口。飢凍兩京。小郡俸薄、尚為衣食之節。賜錢一千貫、絹一千疋、器物一千兩、米一千石、奴婢各十人。」且曰「分千樹一葉之影、即是濃陰。減四海數滴之泉、便為膏澤。于公覽書、亦不嗟訝。曰「鄭使君所須、各依來數一半、以戎費之際、不全副其本望也。」又有巨廬符載山人、遣三尺童子齎數尺之書、乞買山錢百萬。公遂與之、仍如紙墨衣服等。 又有崔郊秀才者寓居於漢上、蘊積文藝、而物産罄縣。無何與姑婢通、每有阮咸之縱。其婢端麗、饒音伎之能、漢南之最姝也。姑貧、鬻婢于連帥、連帥愛之。以類無雙、給錢四十萬。寵盼彌深。郊思慕無已、即強親府署、願一見焉。其婢因寒食果出、値郊立於柳陰、馬上連泣、誓若山河。崔生贈之以詩曰「公子王孫逐後塵、緑珠垂淚滴羅巾。侯門一入深如海、從此蕭郎是路人。」或有嫉郊者、寫詩於座。于公覩詩、令召崔生、左右莫之測也。郊甚憂悔而已、無處潛遁也。及見郊、握手曰「『侯門一入深如海、從此蕭郎是路人。』便是公作也。四百千小哉、何惜一書、不早相示。」遂命婢同歸。至幃幌奩匣、悉為增飾之、小阜崔生矣。 初有客自零陵來、稱戎昱使君席上有善歌者。襄陽公遽命召焉。戎使君不敢違命、逾月而至。及至、令唱歌、歌乃戎使君送伎之什也。公曰「丈夫不能立功業、為異代之所稱、豈有奪人姬愛、為己之嬉娛。」遂多以繒帛贈行、手書遜謝於零陵之守也。雲谿子曰「王敦驅女樂以給軍士、楊素歸德言妻。臨財莫貪。於色不慼者罕矣。時人用為雅談。歷觀相國挺特英雄、未有于襄陽公者也。戎使君詩曰『寶鈿香娥翡翠裙、粧成掩泣欲行雲。殷勤好取襄王意、莫向陽臺夢使君。』」出『雲溪友議』	崔郊居漢上。其姑有婢端麗、善音律。郊嘗私之。既貧鬻婢於連帥、于頔家給錢四十一万。寵盼弥深、郊思慕無已。其婢因寒食来従事家、値郊立於柳陰、馬上連泣、誓若山河。崔生贈之以詩曰「公子王孫逐後塵、緑珠垂涙湿羅巾。侯門一入深如海、従此蕭郎是路人。」或有嫉郊者、写詩於座、公覩詩、令召崔生、左右莫之測也。及見郊握手曰「侯門一入深如海、従此蕭郎是路人。便是公作耶。」遂命婢同帰、至於帷幌奩匣、悉為増飾之。『唐宋遺史』

『雲渓友議』巻上「襄陽傑」	『太平広記』巻一七七「于頔」(出『雲渓友議』)	『事文類聚』後集巻一六「私其姑婢」
令唱歌、乃戎使君送妓之什也。公曰「丈夫不能立功立業、為異代之所稱、豈有奪人姫愛、為巳之嬉娯。以此觀之、誠可竄身於無人之地。」遂多以繒帛贐行、手書遜謝於零陵之守也。」雲谿子曰「王敦驅女樂以給軍士、楊素歸徐德言妻、臨財莫貪、於色不慆者、罕矣。時人用為雅譚。歴觀國朝挺特英雄、未有如襄陽公者也。」戎使君詩曰「寶鈿香蛾翡翠裙、粧成掩泣欲行雲。慇懃好取襄王意、莫向陽臺夢使君。」		

○付録資料２

『怪談』「青柳の話」(原話は『玉すだれ』巻三「柳情霊妖」) を前半・後半①・後半②に分けたうえで、典拠資料のストーリーの差異を比較するために一覧表を作成した。

前半

	「青柳の話」	「柳情霊妖」	「申屠澄娶虎妻」	「申屠澄」	「狐の嫁入り出生の男女」
青年が雪に道を阻まれ、山中の民家に一晩、泊めさせてもらう。	城攻めに赴く際に、母の元に寄る途中で、大雪に遭遇する。	城攻めに赴く際に、母の元に寄る途中で、大雪に遭遇する。	県尉に採用され、赴任の途中で、大雪に遭遇する。	県尉に採用され、赴任の途中で、大雪に遭遇する。	京都に仕官する途中で大雪に遭遇する。
民家には、娘がいて、はじめは身なりがよくなかったが、装いを改め、再び、青年の前に姿をあらわす。	記載なし	十七、八歳の娘	十六、七歳の娘	十四、五歳の娘	十六、七歳の娘
青年にとって、山中の民家が神仙のすみかのように思われた。	娘を「良家の子女の風がある」と表現	民家を「神仙の住居」と表現	民家を「神仙ノ居スル所、麻姑カ棲」と表現	記載なし	民家を「神仙のすまゐ」と表現
青年が詩で娘の腕を試し、娘も見事な返答をし、感動した青年は娘を妻にしたいと申し出る。	和歌の応酬	和歌の応酬	申屠澄の『詩経』の詩篇に対して、娘は『詩経』の詩篇で返す	申屠澄の『詩経』の詩篇に対して、娘は『詩経』の詩篇で返す	和歌の応酬
翌日、夜が明け、青年は娘を連れて、民家を後にする	出発の前になって、青年は娘を妻にしたいと申し出て、娘の父母もそれを了承する。この後、ハーンによる「断り」が入る。	当初、青年は「かりそめ」に娘と契りを結ぶも、翌朝、娘の父母から娘を連れて行くように請われる。	正式な仲人を立てずに自ら婚姻の申し出をし、娘の父母もそれを了承する。翌日、娘を連れて赴任先に向かう。	正式な仲人を立てずに自ら婚姻の申し出をし、娘の父母もそれを了承する。翌日、娘を連れて赴任先に向かう。	娘を連れて都にのぼる。

後半①

	「青柳の話」	「柳情霊妖」	「感詩帰妾」	于頔・崔郊説話
青年が京都に着いた後、娘の存在を知られないように娘を隠す。	娘の存在が知られないようにするため、娘を隠す。	娘の存在が知られないようにするため、娘を隠す。	記載なし	記載なし（※「于頔説話」は、于頔にまつわる他の逸話を含む。前掲注（17）を参照）
娘が権力者から奪われ、その寵愛を受けることになる。	娘が無理矢理連れて行かれ、友忠は懊悩する。	娘が連れて行かれ、友忠は無念ながら、娘のことを諦められない。	娘が連れて行かれ、崔郊は娘のことを諦められない。	娘が連れて行かれ、崔郊は娘のことを諦められない。
娘のことがあきらめられない青年が、娘あての詩を贈る。その詩の内容。	公子王孫逐後塵、緑珠垂涙滴羅巾。侯門一入深如海、従是蕭郎是路人。	公子王孫逐後塵、緑珠垂涙滴羅巾。侯門一入深如海、従是蕭郎是路人。	公子王孫逐後塵、緑珠垂涙滴羅巾。侯門一入深如海、従此蕭郎是路人。	公子王孫逐後塵、緑珠垂涙滴羅巾。侯門一入深如海、従此蕭郎是路人。
青年が娘に贈った詩を見て感動した権力者が娘を男主人公に返す	権力者は涙を浮かべながら、自らが仲人となって、青年と娘の祝言をつかわす。	権力者は涙を浮かべながら、二人の結婚を祝福する。	権力者は、娘に引き出物をつけて娘を青年に返す。	権力者は、娘に引き出物をつけて娘を青年に返す。

後半②

	「青柳の話」	「柳情霊妖」	「申屠澄」	「狐の嫁入り出生の男女」
長らく夫婦仲睦まじく暮らしていたが、妻は正体を明かして亡くなる。亡骸は消失し、妻の小袖だけが残る。	妻が、突然、病を得て、自分が柳の精であることを打ち明けて亡くなる	妻が、突然、病を得て、自分が柳の精であることを打ち明けて亡くなる	夫は、出世はできなかったものの、一男一女にめぐまれる。	夫は、出世こそはできなかったものの、一男一女にめぐまれる。
夫が妻の実家に行き、妻の正体を確認する。	出家した夫が、妻の実家に行くと、家は消えて、柳の切り株三本があるだけだった。	出家した夫が、妻の実家に行くと、家は消えて、柳の切り株三本があるだけだった。	夫が官を辞めて、帰郷する途中、妻の実家に寄る。すでに、妻の両親はおらず、妻は壁にかかっていた虎皮を着て虎に変身し、姿を消す。	夫が官を辞めて、帰郷する途中、妻の実家に寄る。すでに、妻の両親はおらず、妻は壁にかかっていた狐衣を着て狐に変身し、姿を消す。

〔謝辞〕

本稿の執筆については、査読委員の方々から貴重なご意見を賜り、また、関係する先生方からもさまざまなアドバイスをいただきました。この場を借りてお礼申し上げます。